



写真：電気情報工学科4年 田中 秀典「夕風」

Contents

1. 私の「本」との付き合い方
2. 本にまつわるエッセイ《高松》
3. 文芸コンクール入賞結果発表《説間》
4. 講評
5. 入賞作品紹介

事務部長 入木田 浩幸

書評	【佳 作】	通信ネットワーク工学科3年	音島 立哉
	【佳 作】	情報工学科3年	西山 昂佑
エッセイ	【最優秀賞】	1年3組	小比賀 仁
	【優 秀 賞】	通信ネットワーク工学科3年	音島 立哉
	【優 秀 賞】	電子システム工学科3年	小松 脩征
小説	【グランプリ】	電子システム工学科3年	三井 優弥
	【優 秀 賞】	情報工学科3年	児山 諒河
	【優 秀 賞】	1年1組	豊嶋 侑加
短歌	【最優秀賞】	情報工学科3年	井澤 早紀
	【優 秀 賞】	通信ネットワーク工学科2年	佐野 圭亮
	【優 秀 賞】	1年1組	宮武 志成
俳句	【最優秀賞】	1年1組	藤村 円香
	【優 秀 賞】	通信ネットワーク工学科2年	関子 結楽
	【優 秀 賞】	1年1組	岡田 哉汰
写真	【最優秀賞】	電子システム工学科3年	陶國 多聞
	【優 秀 賞】	電子システム工学科4年	河上 豊
	【優 秀 賞】	1年3組	三谷 昇大

6. 教員・学生による推薦図書 全23編（教員9編、学生14編）
7. 教員によるエッセイ 説間キャンパス 電子システム工学科 大西 章也
8. 図書委員長・図書委員より
9. 専攻科生より
10. ブックハンティング紹介
11. 図書館からのお知らせ

私の「本」との 付き合い方

事務部長 入木田 浩幸



みなさん、こんにちは。事務部長の入木田（いりきだ）です。日頃は学生のみなさまとはあまり関わりがありませんが、今回、図書館だよりの巻頭言を依頼されましたので、僭越ながら、私の「本」との付き合い方について、いくつかご紹介いたします。

一つ目は、まずは自分で調べてみるという姿勢を大切にするということです。私は一人っ子で、小学校の頃は転校生でしたので、あまり友達と外で遊ぶこともなく、その当時、家庭で備えるのが流行っていた？某日社の百科事典の各巻をランダムに見ていくのが楽しみでした。

小学生のある夏休みに、自由研究をまとめてみんなの前で発表するという宿題が出されたので、自分なりにテーマを「日本の貨幣」に決めて、いつものように百科事典で調べてまとめました。そして意気揚々と、みんなの前で日本で最初の貨幣は「わどうかいちん」ですと発表したところ、「ちん」という音がうけたのか大爆笑になるわ、先生からはそれは「わどうかいほう」と読むのですよと言われるわで、散々な結果になったという嫌～な思い出があります。現在では両方の読み方の説があるようですが、当時の百科事典小僧には強烈な思い出として残りました。しかし、教科書に載っていることを鵜呑みにせずに、自分で一度は調べてみるという姿勢も大切ではないでしょうか。

二つ目は、自分の興味が沸いたものから読むということです。昨今、大学などでは一般教養が軽んじられてきた弊害が問われ、その結果として現在ではリベラルアーツが必要だとの認識になってきています。そこで、まずは自分が興味を持ったものから、「本」を読んでみてはいかがでしょうか？例えば、自分が好きな漫画やアニメで、そこに出てくる事柄が分からなかったり、興味が沸いたら、まずは自分で調べてみる。調べてみたら、また分からない事柄が出てきたのでまた調べる。そうすることを

繰り返してやってみることで、自分が興味を持った事柄について、自分なりに知識が蓄えられていき、ある日、突然、ごく稀ではありますが、目から鱗が落ちるように全体像が見えてくる[見えた気になる？(笑)]。そうすると「本」と「自分」だけの付き合い方がより楽しくなってくるのではないのでしょうか。

一つ例を挙げますと、「もんげーバナナ」が気になったので、バナナの種類や歴史に関する「本」を調べて読んでみる。するとバナナ栽培に大手海外資本が動いていることが分かる。それではコーヒーは？、ココアはどうなのか興味が沸いてくる。或いは、バナナなどの果実等の受粉に必要なミツバチの数が減ってきていることが気になったので、ミツバチの大量死についての「本」を調べて読んでみる。するとミツバチの生態は？農薬との関係はどうなのか？、おおっ、Xファイルか！（苦笑）といった具合です（笑）。

三つ目は、友人や知人の読んでいるものを取り敢えず読んでみるということです。私には2つ年上の従兄がおり、中高校生の頃にその従兄から受けた影響も大きいです。その従兄は「安部公房」、「大江健三郎」、「遠藤周作」、「北杜夫」などを当時読んでおり、私も薦められるままに、それらの作家の著作を読んで、純文学にかぶれました（笑）。長文を読むのはなかなか苦痛ですが、きちんとした文字を読むという行為も、読解力を養う上では大切なことかと思えます。

最後になりますが、昨今、私と「本」との付き合いの中で大きく占めるようになってきたのは、京都にあります「国際日本文化研究センター（日文研）」の先生方の「本」です。自分が勤めていたこともあります。初代センター長の「梅原猛」先生（故人）の「隠された十字架」に衝撃を受けて以来、先生のファンになりました。今でも「小松和彦」、「井上章一」、「井波律子（故人）」など、センターの諸先生方の著作を収集しては読んでいます。最近では「磯田道史」、「呉座勇一」両先生の著作が有名でしょうか。結局のところ、「本」との付き合い方は、好きになったから読んでいるということに尽きるだけなのかもしれません。

以上、私の「本」との付き合い方をご紹介いたしました。このあたりで、Edward Van Halen氏のご冥福をお祈りしつつ終わります（合掌）。



本にまつわるエッセイ

〈高松キャンパス〉

大学時代の思い出とともに

一般教育科 坂本 具償

自分が大学生であった頃に読んだ漱石の『草枕』の中にある次の一節がとても印象に残っています。少し長めですが、引用します。

苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたり人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽々した。飽き飽きした上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大変だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞するようなものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である。(中略) うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。採菊東籬下、悠然見南山。ただそれぎりの裏に暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出てくる。垣の向うに隣りの娘が覗いてる訳でもなければ、南山に親友が奉職している次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去った心持ちになれる。

文中の「採菊東籬下、悠然見南山」は、「菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る」と読みますが、陶潜(陶淵明)の「飲酒」という詩の一節です。高校の教科書などにも採用されているので知っている人も多いと思います。東側の垣根の下で、菊を摘もうとしてふと見ると向こうには悠然としたたずまいの南山が見える。その南山を悠然とした心持ちで眺める。「悠然」という言葉は、「南山」と、そしてそれを眺める「人」との両方を修飾するものだと中国文学の秦斗吉川幸次郎氏の言葉です。特に中国の古代にあっては、「自然」と対峙するという発想はあまりなく、「自然」に寄り添い、あるいは「自然」と「自分」とが一つになることを目指すというものが多くあります。

「暑苦しい世の中をまるで忘れた光景」と漱石は表現していますが、今の時代「暑苦しく、煩わしく、せわしく、忙しい」世の中になっているようで、ゆっくりと歩き、立ち止まっては周りの風景を眺める余裕がほしい。また、「垣の向うに隣りの娘が覗いてる訳でもなければ」という言い回しがとても面白く、思わず笑ってしまいました。「超然と出世間的に利害損得の汗を流し去った」生き方をしたいものですが…。

これまた大学生の頃の話です。当時先輩が読んでいたこともあって埴谷雄高の『死霊』を読み始めました。しかし、内容がなかなか頭に入ってきません。とても難解なもので何やら哲学書でも読んでいるような感じのする小説でした。主要な登場人物の一人に「三輪与志」という人物が出てくるのですが、そもそもどう読むのか。「三輪」はもちろん「みわ」でしょうが、「与志」は？先輩は、近代文学がご専門の先生(恩師の一人)に聞いてみようかと言っ

ていたが、とうとう聞かずじまだったように思います。内容の難しさだけでなく、登場人物の名前もよくわからないまま読み進めるといっても、何かしっくりしない感じでした。ところが、読み進めているときに突然「我愚人之心也哉 沌沌兮 俗人昭昭 我獨昏昏 俗人察察 我獨閔閔」という一文が目飛び込んできました。それは今本『老子』第二十章にある一文でした。金谷治氏の訳(講談社学術文庫『老子』)を借りれば、「わたしは愚かもの心だよ、にぶくってはっきりしないのだ。世俗の人びとはきらきらと輝いているが、わたしだけはひとりぼんやりと暗い。」となります。

「学を絶てば憂い無し(学ぶことをやめてしまえば思い煩うこともなくなる)」という衝撃的な一文で始まるこの第二十章は、世俗と己との相い容れない対立と、それでもこの世俗の中で生きていかなければならない「我」の深い憂いなどが語られる章です。ちょうど『老子』を卒業論文のテーマに選び、悪戦苦闘していた時期だったので感動してしまいました。この小説を読みこなすことは、とても無理だとそのとき思いました。きっと西洋哲学のみならず東洋哲学も含めて幅広い素養が必要なのだと。それから四十年という歳月が過ぎた今でも、それを読みこなす自信はありません。因みに、当時自分は『死霊』を「しりょう」と読んでいましたが、この小説が文庫化(講談社文芸文庫)されたときに振られた読み仮名によれば「しれい」と読むようです。そして当時読めなかった「与志」ですが、文庫版には「よし」と読み仮名がついていました。なんだ、そのままよかったのか。



ミホとトシオの物語

一般教育科 野口 尚志

いくつかの作品にまたがって語られる、ミホとトシオという夫婦の物語である。二人は戦争のさなかに出会った。場所はミホが育った奄美群島・加計呂麻島。そこに赴任してきた部隊の「隊長さま」がトシオだった。トシオは近いうちに魚雷艇「震洋」に乗って敵艦に突入し、死ぬことになっていた。よく知られた空からの特攻ではなく、海での特攻である。

島尾ミホの『海辺の生と死』（中公文庫）に収められた「その夜」は、特攻直前のことを書いている。夜更け、ミホは二人の仲を知るトシオの部下に出撃を知らされた。部隊に関係者以外の接近は禁じられていたから、海と夜陰に身を隠しながら彼女は急いだ。たとえ出撃前に会えたとしても、それは確実に最後となるはずだった。

しかし今私は夜更けてたった一人、禁制の島尾部隊へ続く浜辺を、しかも監視員たちのいる真下を歩いているのです。ああ、どうしたらいいのでしょうか！ 私は退きも進みもならず、渚のアダンの木の下にうずくまっていました。悲しみがどっと溢れてきて、父と母を心の中で呼びながらたすけを求めて泣きました。

トシオのもとにたどり着く前の一瞬に襲われた絶望を、ミホはこう書いている。この時、彼女は死装束を着ていた。部隊の出撃後、島民も自決することになっていた。

これが、1945（昭和20）年8月13日の夜のことである。むろんというべきか、部隊に出撃命令が下ることはなかった。翌々日には玉音放送によって日本の無条件降伏が知らされる。この間のことを、トシオこと島尾敏雄は小説「出発は遂に訪れず」（新潮文庫、『島の果て』集英社文庫にも収録）に書いている。期せずして二人は生き残ったのだった。

翌年、二人は結婚し、やがて息子と娘が生まれた。だが、ミホとトシオの物語は、この後の方が長く、過酷だったとも言える。次の物語の発端は、トシオの浮気だった。

小説の中には、あまりに描かれる状況がひどいので、かえって笑えてくるものがある。島尾敏雄の『死の棘』（新潮文庫）もそうした作品の一つだろう。ことあるごとに発作のように始まる妻からの際限のない詰問と、それによって「審（さば）かれる」夫。諍い続ける父母に振り回される小さな子供たち。もはや奄美にいたころの若くみずみずしいミホとトシオの面影はどこにもない。あるのは精神も肉体も七転八倒する極限の夫婦の姿である。こうした状況を、トシオはまるで軍隊時代の日記の習慣の延長のように、克明な記録として書いてしまった。

世に私小説は数多いとはいえ、夫婦の形をここまで追及したものは他にない。しかも、梯久美子が著したミホの評伝『狂うひと』（新潮社）によれば、狂った人として妻を書いたトシオの原稿を、清書していたのはミホだった。それが彼らの夫婦関係だったということだろうか。こうして世に出た作品は、現在も戦後文学の名作の位置にある。

つれづれなるままに、めでたき書物と出会うこと、ゆく川の流れの如し

一般教育科 門脇 大

これといって急ぎの用もない穏やかな日に、ただひとり朝から夕べまで原稿にむかって、あれこれと心に去来するとりとめもないことを記していると、不思議と心がざわめいてじっとしてられなくなる。このような気分で、自己紹介を兼ねて本に関する雑文をしたためてみよう。

細かないきさつは省くけれど、令和二年度から香川高等専門学校・一般教育科の講師（国語）となった。専門としているのは、江戸時代の怪談（幽霊やお化けの話）である。江戸の怪談を中心に勉強しているけれど、江戸の文学や思想・歴史・風俗、そして宗教的営為に魅了されて久しい。これらに関する書物を読みふけてきた。さらにつけ加えると、日本文学全般がおもしろく、翻訳だけれど外国の文学作品も好んで読む。いや、興味のおもむくままに、目にとまった本はどんなジャンルの本でも、たとえ数ページだけでも読む。読書は雑食にして大食でありたい、といつも思う。

ふと思い返してみると、いつの頃からか、本を読むという行為が趣味の領域を保ちつつも、一方では仕事の一部となった。気がついてみると、気ままにページをめくるだけではなくて、論文を書いたり議論したり、あるいは文学や書物、怪談について語る、といったことが日常となった。ひたすらおもしろい本を探し求めて、古本屋を巡ったり図書館を彷徨する日々は過ぎ去ってしまったのだ。本を読む、というこの単純きわまりない行為に、しがらみめいたものがつきまとうようになったと言い換えてもよい。すこし気取った言い方をすれば、いつの間にやら本にまつわる教条（ドグマ）に取り囲まれて、その生命（アニメ）を見失いかけてしまう瞬間が訪れる、とでもいえよう。

本に関することが仕事の一部となったことは、本好きには幸福なことだ。そもそも、本を読むと一口に言っても、趣味の本、勉強のための本、仕事用の本、などなど用途や場面によって分けられる。趣味と勉強の区別は曖昧だけれど、やはり読み方は違う。いつの間にか、どのような本をどのように読むのかを器用に使い分けることが身についていた。しかし、やはり至福を感じるのは、はじめて出会った書物を読み始めて、我知らず夢中になる瞬間かもしれない。いや、一冊の書物を読み終わってから、その物語や思索の続きを探し求めて、幸運にもその続編が奇跡的におもしろかった時こそ、本当にうれしいものだ。

ところで、あたりまえのことだけれど、世の中には無数といってよいほどの本が溢れている。とりわけ数年前からは、紙以外の本が占める割合も高くなって、紙の本を好む者としては時代に取り残されたままだけれど、かといって不自由を感じているわけでもなくて、グーテンベルクや安土桃山時代からの名も無き職工たちに感謝し

つつ、相も変わらず山積みの本たちと同居して、葉を挟むことすらできずに眠りに落ちる日々を送っている。これは幸せなことだ。

本を読むことは途切れることがなく、しかも、同じ本でもいつも同じ感興をもたらすというわけでもない。絡まりあう思考のあわいにふっと浮かぶその思念は、消えたり形を成したりして、長く意識の上に留まるということがない。

きっと、これからも紙の本に執着し続けるだろう。閑雅なる日々の中で、これから出会う書物への期待を抱き続ける日々が続くことを、強く願う。



偶然

建設環境工学科 林 和彦

レストランかどこかで「お父さん、どれ食べる？」と聞かれると私は決まって「右から2番目」と答える。家族には親父ギャグにしか映らないようで、最近反応は少ない。でも繰り返せば伝わるようで、最近では聞かれずに注文されるようになった。こう答えるには訳がある。

好きな食べ物、なりたい職業などは物心ついた幼稚園ぐらいから何千回と尋ねられてきたのだが、幼心に①どうしても決められない、②一度決めたことも忘れっぽい、③興味はその時々で変わる、など色々と理由があり答えるのに苦心してきた。私はそんな子供だった。

大学で研究室に入り、日々朝から晩まで学友と研究やたわいもない雑談をして時間を過ごす中で、大学の近くにある弁当屋と定食屋に通うことになった。独学でプログラミングを学んでいる最中だったので弁当屋のメニューを決めるためのプログラムを開発した。中身は単なる乱数を使って「今日はからあげ弁当」とか表示されるだけのシンプルなもの。定食屋では、壁に並んだメニュー表の右から順番に頼んでいくルールを決めた。好きなもの、嫌いなもの、他のメニューと比べて極端に値段が高いステーキ、なども学友との笑いのネタにしながらか食べ続けた思い出がある。

ここまで来ると趣味になって、下宿している街に愛着をもつというネタで古い商店街の全ての店で買い物をするということを目指したのはいいが、高齢女性向けの「おしゃれ洋品店」ではさすがに着られる洋服はなく困ったことを覚えている。

高専で働き始めてから4年生の担任を3回経験した。4年生は夏期インターンシップへの応募に始まり、進路選択を経験する学年であり、多くの学生が自分の希望する職業・会社が見つからない、と悩む。私は決まって次の問いかけをする。「皆さんの趣味は何ですか。得意とする分野は何ですか。」野球、バンド活動、など様々な答えが返ってくる。「では、それに触れた人生で最初のきっかけは何ですか。」と畳みかける。家族に連れられてプロ野球観戦をした、兄が野球チームに入って見に行った、音楽番組で感化された、等々。

そう、人間が何かを初めて知るきっかけは、強制・偶然である。「私は○○をやるために生まれてきた。」と言う人に会ったことがない。多分、色々なものごとに触れてくる中で、体験し、じっくりくるものとして自然淘汰されてきたのが今の好きなこと・得意なことなのだと思う。その裏には、無意識のうちに切り捨ててきたものごとは数えきれないだろう。

長くなりすぎたのでまとめに入る。これから好きなものに出会う、これから好きになるかもしれないものに触れるためには、強制的に、偶然に出会う必要がある。その機会が多ければ多い方がマッチする確率も上がる。そのひとつに、読書がある。それも乱読。そう言う私の小さい頃は読書量も少なく、好きなシリーズしか読んでこなかった。読書にそういう効果があるとは考えもつかなかったためだ。

本の素晴らしさに気づいたのは大人になってからである

が、今は本棚を右から順番に読む物理的な時間がなくなったので、個人的に紹介された本は必ず読むという風になっている。そして、信頼する人や団体が紹介する本も、できるだけ読むようにしている。本校の図書館で企画している教員や学生が紹介する本も、ありとあらゆるジャンルの本が紹介されていて、私は楽しみにしている。そのような特定のジャンルに縛られない本の紹介というのはとても参考になる。しかし本を読み慣れていない人にとっては多数紹介された後の敷居も高く、それらの本の中から自分にとってどの1冊を読めばいいのだろうかと思うが、そんな些細なことは全部読んでから心配すればよい。やるべきことはひとつ。迷ったら強制的に右から2番目を手に取る。偶然の出会いがあるはずだ。

最後にひとつ。中学生の時になりたい職業を問われ、次のように答えたのを強く覚えている。「なりたい職業はまだ決まっていないが、少なくともならないと確信が持てる職業は、スポーツ選手と先生である。」このように、小さな頃の予測は当てにならないので安心しよう。



ประเทศไทย ～魅惑のタイ王国～

総務課 坂元 大介

～タイ王国～ 東南アジアの一途上国という程度の知識しかなかった私がこの未知なる国を明確に認識したのは1997年初冬のことである。当時凡戦が続き不振を極めていた同郷のプロボクサー辰吉丈一郎選手のファンであった高校2年の私は、辰吉選手が挑戦する対戦相手としてタイから空路来日したシリモンコン・ナコントン・パークビューという名の二十歳の世界チャンピオンの報道をテレビを見て衝撃を覚えた。訳の分からない長い名前もインパクトがあるが、褐色の肌と同じバンタム級とは思えないほどの圧倒的な体格で、現地で絶大な人気を誇る男前のチャンピオンから漲る自信と威圧感はテレビ画面を通じても存分に伝わり、辰吉惨敗の悲観的な予想を禁じ得なかった。

試合は撃的な再逆転KOにより辰吉選手が感動的な王座返り咲きを果たしたのだが、負けて号泣する前チャンピオンの姿と併せ、勝負の世界の非情さを痛感させられた衝撃は今でも鮮明に脳裏に焼き付いている。その約1年後、母国にチャンピオンベルトを奪還し、後に幾度となく来日することとなるウィラポン・ナコンルアン・プロモーションもまたタイの選手であることは格闘技王国の底力とともに因縁を感じさせられる。

前置きが長くなったが、翌98年の夏休み、私は受験生の立場を顧みず、安いパックツアーを見つけてきた父親と共に人生初の海外旅行として渡タイした。初めての異国の地での食べ物や風土、人々の良い意味でのいいかげんさ・屈託の無さ・小汚さは正に〔微笑みの国〕を象徴しており、様々な魅力が私の心を鷲掴みにし、掴まれたまま今日に至っている。

月日が経ち、縁あって本校に職員として着任し、更に縁あって国際交流室主催の海外研修に参加する機会を頂き、2度目のタイで連携協定校ラジャマンガラ工科大学や国際インターンシップ・共同研究関連企業等を視察することができたことにより、タイへの一方的な愛着心はより一層膨らんでしまった。

人生の折り返し地点に差し掛かった現在、集大成として本格的に現地語習得に向けた学習を開始し、折を見て本校図書館に通っているところである。今まで図書とはあまり縁のない人生を歩んできたが、本校に豊富に揃えられている書籍を通じて現地の文化に触れあい様々な発見ができる時間は日ごろの労働に疲弊しきった私を高校生時代に戻してくれる癒しのときとなっている。今後本校の連携協定校や高専機構が新展開しているタイ高専等との関連業務等何らかの形で貢献できることがあればこの上ない幸せである。

不惑の初冬、今日も各所から襲い掛かってくる無理難題をなんとか切り抜けようと悪戦苦闘しながら勤務している。夢の国で ไทย! (※) と言いながら悠々自適に過ごす老後に想いを馳せながら…。

※ チャイヨー! 万歳・乾杯等の意

夏を忘れて～『ペンギン鉄道 なくしもの係』を読んで～

機械工学科2年 西濱 光琳

いつもの固いICカードではなく、紙の切符を握っている。駅に着くたびに一人二人と降りていき、車内はどんどん広がっていくように感じる。

握った左手をひらくと汗で切符が波打っている。ズボンのポケットに切符をねじ込んで大きな窓に目をやった。

住宅、畑、工場、土産屋、そして海。海。海。強く白い光と濃い黒い影が目まぐるしく交差する。まぶしくて外を見ていられなくなり思わず目をつぶった。土佐くろしお鉄道はまっすぐに進む。この鉄道にも「なくしもの係」があるのだろうか。

「ペンギン鉄道なくしもの係」は本屋で偶然見つけた本だ。本当は猫が好きだけど、ペンギンもいい。この車両にも乗車していればいいのに。母は昔、ロンドンの地下鉄で首に猫を巻いた男を見たと言っていた。もちろん、ここにはペンギンも猫も乗っていないようだった。

そのかわりにレトロな自動販売機が置いてある。ICカードでもスマホでも買えない旧型。小銭を集めて武骨な四角いボタンを押すと、音をたててジュースが降ってきた。以前行った鉄道忘れ物市では、大量の傘の奥に立派なカメラがあった。

僕にとってスマホと同じくらい一眼レフカメラは大事だ。ズシリと重く、シャッター音はシャープで鋭い。カメラをなくすなんて。なんとなく自分のリュックにしまったカメラの存在を確かめる。

ああ、そうだ。僕は去年、東京駅で黒い腕時計をなくしたんだ。安物だけど正確で使いやすかった。なくしたということに気づいたのが半月もたった後のことで、東京駅のなくしもの係に電話しようか迷っているうちにすっかり忘れてしまっていた。

誰かが拾ったかなあ。捨てられちゃったかなあ。東京駅のなくしもの係に保管されているといいなあと思う。僕の黒い腕時計が立派な赤レンガの東京駅のどこかでこっそりと時を刻んでいたらなんだからうれしい。汗をかきながら室戸岬の展望台にたどり着いた。少しだけ丸くなっている水平線を眺めて大きく息を吸う。ゆっくりと息を吐きながら遠くに見えるコンテナ船にピントを合わせた。

8月の強烈な日差しが波にきらきらと反射している。それに負けずに僕は息を止めてシャッターを切った。待ちに待った夏休み。でも今年はコロナのせいで遠くに行けない。予定はすべてダメになった。

こんなことってあるだろうか。くやしい。僕たちは2020年の夏休みをなくしたのかもしれない。でも、遠く離れた東京駅の隅っこで、あの黒い腕時計が代わりに旅をしているんじゃないかと思うのだ。

まだ読んでいない本を語る

機械工学科4年 メッシー

今回のテーマは本のことなので、読み終わった本のことを書こうと思っていたのですが、白紙のページを前にすると頭の中も真っ白になってしまいました。もしかしたら、すでに読んで楽しんだ本の話もできるかもしれませんが、それではオリジナリティに欠けると思うので、まだ読む機会のない本の話、今までの経験から想像してみたいと思います。

グーグルによると、2010年8月5日の時点で、世界にはちょうど129,864,880冊の本がありました。もう10年も前のことだから、これを書いている今の方が確実に多いでしょう。私が本を読むようになったのは、物心ついたときからですから、単純計算で1000冊くらいは読んでいたのではないのでしょうか。一生読みきれないとわかりつつ、世界中の本の数と比べてみれば、大海の一滴にも満たないでしょう。そんなことを考えていると、自分の本棚にある20冊の本が待っているのを見て、急いで読まなくては気がすまないと思うようになりました。

私は、今では読んで話すことができるようになったかもしれませんが、日本語を中心に、まだまだ私が出会う機会のなかった美しい言葉や表現が確かにたくさんあります。私は日本語を上達させたいと思っています。それで、これまでの経験からすると、本はいつも私が言語を上達させるために使っていた方法でした。まだ聞いたことのないような独特な表現を使った古い本がどこかにあるはずであり、その本を手に入れることができれば、さらに私の日本語能力を伸ばすことができるでしょう。

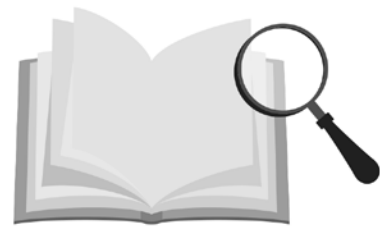
また、気づいたことですが、著者は自分の環境や背景、経験に合わせて本を書いています。本は、世界の新たな視点を発見するために目を開かせるメガネです。日本の文化や日本人の考え方をより深く理解するためには、本は便利なツールになります。

読書が好きなのは、毎回それが私を旅行させるからです。私は、安藤忠雄『建築を語る』の中の次の言葉が好きです。「『旅』はそのような実際の身体的移動を通じてだけではなく、回想、さらに夢想することでも可能なものです。『旅』とは、惰性的な日常を離れ思考の深度を深める、自分との『対話』なのです。旅するうちに、必要のないものは切り捨てられ裸の自分と向き合う。その過程で一進一退を繰り返していく。これが一人の人間を強くしていくのです。」これからも、まだ読んでない本を読み始めたら、新たな旅に出て、未知な世界を一周できるのでしょう。

まだまだ自分のことを知らないことが多いのですが、言葉にできなかった気持ちを言葉にすることで、自分のことを理解することができるようになりました。歳を重ねるごとに、わかることも増えてきましたが、同時にわからないことも増えてきたので、次の本でその暗い部分が明るくなるといいなと思います。

変化は常に自分から始まるものですが、自分が何者であるかを知らない限り変化は起こりません。これこそが、

本が私に感じさせてくれるものです。本が提供してくれる世界を発見する機会はもちろん、自分のことも発見できる機会に恵まれた人間であることに感謝しています。私がそれらの本にしてあげられることはないかもしれませんが、本のおかげで、私は私の想像力を発揮させることができます。本はより良い世界のための鍵であり、私たちがお互いを理解し、より良い生活を送るのに役立つものであると、私は信じています。皆さんも、読書と一緒に旅に出ませんか。



文芸コンクール 入賞結果発表〈詫間キャンパス〉

文芸コンクールの入賞者の表彰式を、11月11日（水）に実施しました。今回はコロナ感染防止のため、参加者を制限しました。式にはグランプリ・最優秀賞受賞者が参加しました。入賞者は以下の通りです。



【詫間キャンパス】.....

書評

佳作	通信ネットワーク工学科3年	音島 立哉
佳作	情報工学科3年	西山 昂佑

エッセイ

最優秀賞	1年3組	小比賀 仁
優秀賞	通信ネットワーク工学科3年	音島 立哉
優秀賞	電子システム工学科3年	小松 脩征

小説

グランプリ	電子システム工学科3年	三井 優弥
優秀賞	情報工学科3年	児山 諒河
優秀賞	1年1組	豊嶋 侑加

短歌

最優秀賞	情報工学科3年	井澤 早紀
優秀賞	通信ネットワーク工学科2年	佐野 圭亮
優秀賞	1年1組	宮武 志成

俳句

最優秀賞	1年1組	藤村 円香
優秀賞	通信ネットワーク工学科2年	関子 結菜
優秀賞	1年1組	岡田 哉汰

写真

最優秀賞	電子システム工学科3年	陶國 多間
優秀賞	電子システム工学科4年	河上 響
優秀賞	1年3組	三谷 昇大

講評

詫間キャンパス

一般教育科 国語科

図書館文芸コンクールは今年度で第5回を迎え、165人369作品という多数の応募作品が集まった。以下、受賞者を中心として、部門ごとにコメントを付していく。

・書評部門

書評は個人の感想でなく、本を客観的に評価し論じることを目的とする。なかなか馴染みがないためであろうか、応募の多数は読書感想文となっていた。その中で書評として本の特徴や評価を述べる形式をとっていた作品が、受賞作品として選ばれた。音島立哉さんの「質問力の基本 大切だけど、だれも教えてくれないたった1つの座標軸」は「質問」のあり方について、自身の遠隔授業時の体験と結びつけながら作者の主張を丁寧に読み解いている。西山昂佑さんの「『乙女ゲームの破滅フラグしかない悪役令嬢に転生してしまった…』の魅力について」は登場人物のキャラクター性という観点から、作品の魅力进行分析する。ただし、両者の作品ともに対象となる本の客観的な評価という点において、一歩及ばない部分が見受けられた。今後の期待を込めて両者を佳作として選定した。

・エッセイ部門

エッセイ部門はいかに自分の主張を印象深く、そしてわかりやすく読み手へ伝えることができるか、が鍵となる分野である。形式に決まりがないのがエッセイの特徴であるため、自身の主張へと至る文章の運び方が重要になってくる。最優秀賞の小比賀仁さんの「当たり前が当たり前であること」は、新型コロナウイルスで変わってしまった生活をきっかけに、見過ごしていた日常を改めて見つめなおす作品である。タイムリーな話題を挙げた上で、自身の主張へ導く文章の展開が非常にスムーズである点は特に優れている。優秀賞の音島立哉さんの「儒家と道家から思う現代社会」、小松脩征さんの「神は存在するのか」は、いずれも自身の得た知識を基礎として思考を深めていき、大きな主題へと話題を繋げることに成功している。このように受賞作品は主張を支える根拠が明確で、論理的な文章構成が評価に繋がっている。次年度の参考にしてもらいたい。

・小説部門

今年は全21作品と、例年になく多くの小説への応募が見られた。ジャンルやテーマも多種多様で、それぞれの熱意が伝わってくるような印象的なものが集まった。小説はプロであっても、既存作品に影響を受け、無意識による模倣が入ってしまうことがある。そのため、いかに自分のオリジナリティを表現できるかが、評価のポイントであった。三井優弥さんの「無私無欲」はサラリーマンの抱える仕事と仲間へ抱える鬱々とした心情を、ハチのモチーフと重ねながら描く。大きな事件を語る作品ではないが、短い時間の中で変化していく主人公の心情を繊細に描きだすこ

とに成功しており、ハチのモチーフが与える印象が変化する工夫も興味深い。テーマ性や独自性の観点からも、今年度のグランプリ作品としてふさわしいと評価した。優秀賞の豊嶋侑加さんの「サイコキネシス。」はタイトルから与えられるイメージからの裏切り、兎山諒河さんの「送られてきた写真」は冒頭部分からの展開への裏切りというように、読み手を引き付ける工夫が評価へと繋がった。

・短歌部門

短歌部門・俳句部門ともに「夢」がテーマとして設定された。眠りによってもたらされる「夢」、将来の目標としての「夢」など、様々な解釈をすることができるテーマである。しかし、それを限られた文字数で表現することに難しさを覚えた人も多かったようである。最優秀賞である井澤早紀さんの作品は、お盆の情景を詠う自由律短歌である。先祖の帰りを微睡みの中で自覚するというストーリーが描きだされ、音のリズムにも表現の工夫が見られる。優秀賞の宮武志成さんの作品は「夢」が叶った合格発表日の心情を「夢」心地として二重に意味をもたせている。同じく優秀賞佐野圭亮さんは、アイモードという一見「夢」とは結びつかないモチーフを取り上げた点がオリジナリティの観点から評価につながった。

・俳句部門

俳句部門に関しては「夢」というテーマを季語に結び付け、限られた字数の中表現するとう制約が鍵となった。最優秀賞の藤村円香さんは、新型コロナウイルスのため、帰省がない寂寥たる状況を表現する。成長を夢見るモチーフである鯉のぼりの不在という空しさを取り上げ、他とは異なる形で「夢」を表現した。優秀賞の岡子結楽さんは流星群を前にして、願いをこめる夏の情景を鮮明に表現する。同じく優秀賞の岡田哉汰さんの作品は夢を求める姿を「蛾」と表現し、夢と現実の二項対立として際立たせている。今回の応募作品は、無季俳句が多く見受けられた。確かに無季俳句も俳句として認められた形式ではあるが、確かなイメージを伝えるにはテクニックが必要となる。あえての拘りではないのならば、有季定型を基本としてほしい。

全体として、新型コロナウイルスをテーマとして取り上げているものが多く見受けられた。これは現状に対して抱えるものを文章として昇華させたい、という思いによるものであろう。確かに文章を書くにあたって、誰かに伝えるための工夫は必要である。しかし、最も重要なものは、書き手の「書きたい」という思いではないだろうか。受賞者も、また受賞に届かなかった応募者も今回の「書きたい」と思った気持ちを大事にしてほしい。そして、次の機会へと繋げ、文芸、言葉の世界に親しんでくれることに期待する。